

巻 頭 言

継続は力なり

平成5年に開設した看護福祉学部は、この春で16年目を迎えます。学部の卒業生はすでに2800名を超え、全国各地で活躍しています。また、平成9年に開設した看護福祉学研究科の修了生は、修士課程と博士課程を併せて200名を超えました。そこで、在学生、卒業生および教員の交流をはかる場として、看護と福祉の実践および学問的発展を願い、平成16年に看護福祉学部学会を設立し、毎年、学術大会の開催（9月）、学会誌を発行（3月）しております。

昨年の第4回学術大会のテーマを「発見から発展へー看護/福祉の拡がりー」とし、私たち専門職が看護や福祉の実践を省察^{せいさつ}することで、独自の知識体系を発見し、それをどのように発展させることが可能かを問う場にしたいと考えました。そこで、シンポジウムでは、臨床の場で活躍する卒業生に登壇して頂き、保健師、認定看護師、医療ソーシャルワーカーの立場から看護あるいは福祉という事象を概観し、他職種とのネットワーク化を語っていただきました。彼らは日々の実践において、どのような健康問題あるいは生活者と向き合い、専門職としての能力をどのように表現しているか、また様々な人々との共通言語を持つことの難しさなど、生き生きと話してくださいました。

看護福祉学部学会を設立した当初から、「看護と福祉の統合を目指した学部といっても、基盤は同じという認識はあるが、そのことを実践の領域では実感されていない」といわれてきました。しかし、今回の卒業生の活躍は、これらの声を払拭してくれたと思います。簡単にいえば、実践とは人間が持っている知識に基づいて外界に働きかけ、対象（事象）を変えようとする努力のことで、知識はその目的を達成するための地図ともいえます。毎日の実践によって若い彼らの知識が更新され、以前よりも詳細な地図（知識体系）を創りあげていく。その結果、看護や福祉という複雑な事象の特徴（共通性と独自性）を具体的に説明できるようになったのだ、と思います。やはり「継続は力なり」なのです。

2008年3月31日

北海道医療大学看護福祉学部学会
第4回学術大会長 花岡 眞佐子